

藤森 進先生への感謝の記

人間科学部長 谷口 清

藤森 進教授は2014年7月22日をもって本学園就業規則第15条の規定により退職された。齢60を前にしての退職であり、残念でならない。私は藤森教授より5歳年長であり本学への赴任も遅れているので、本来ならこのような文書を書くめぐりあわせにはならなかったのだが、本学赴任後ともに大学の今後のあり方を語り合わせていただく機会が多かったところから、ここに感謝の想いを記させていただく。

藤森先生は年譜にあるように1998年岡山大学より文教大学に迎えられ、15年余本学に尽くしてこられた。この間越谷校舎教務委員長に始まり文教大学人間科学部長、副学長・学長代理を務められ、また理事も4年間勤められるなど、本学運営の中枢を担われてきた。特筆すべきは人間科学部が2学科体制で定員400名となり、学部のあり方が大きな問題となっていた時期に学部長職に就き、2年間という短い任期中に心理学科を設立、併せて新12号館を建設、3学科体制という現在の人間科学部の形を作られた。表現が適切であるかどうかはともかく、いわば人間科学部中興の任に当たられたとって過言でない。

そのような激務がたたり、先生は2度倒れられた。1度目は学部長職の任期が終わる間際、2006年3月であり、1年間の欠勤を余儀なくされた。2度目が復帰後4年余りを経た2011年7月で、今回の退職につながる。1度倒れられて後、無理を避けておられたが、少子化による大学経営の厳しさが見通されていた中で、先生の確かな分析力と果敢なリーダーシップへの期待から、何とかその天賦の才を大学運営に生かしていただきたいと、理事をお引き受けいただいた。理事としては本学園校友会設立などに大きな力を発揮されたが、その任期途上で再度の卒中であった。身近にあったものとして充分なお手伝いができず、結果として無理がたたったこと、また配慮が十分でなかったことについて深く反省している。以下に見るような先生の学問的業績と学園への寄与を考えると本学のみでなく、日本の学界、教育界にとっても大きな損失である。

藤森教授の学問的功績はテスト理論を大きく前進させたことにあり、項目反応理論の我が国の第一人者である。筆者はその領域の専門家ではないので、その学問上の評価能力を持たない。ただ我流のコメントを許していただけるなら、古典的テスト理論が個々の問題（対象）の測定範囲を超えることができなかつたため、テストの汎用性を論じる余地がなかつたのに対し、項目反応理論は一般能力を想定することによってテストの相対化を可能とし、テスト間、被験者グループ間の相互比較への道を開いたことにあるのではないかと理解している。この間のコンピュータの急速な発展が一般モデルに基づいた膨大な計算を可能とし、藤森先生は緻密なプログラミング能力によって常にその最先端を歩んでこられた。その歩みは忙しい公務の間にも、たゆむことなく続けられ、その貴重な成果は次頁年譜に見られるように、本学部紀要「人間科学研究」にも多く収載されてきた。但し、項目反応理論における一般能力はあ

くまでも仮説構成概念であり、その精緻化（あるいは検証）は常に求められるところから、藤森教授が果たすべき役割は今後とも非常に大きいものがあった。

藤森先生の教育者としての姿は倒れられたまさにその時に浮かび上がった。倒れられたのは春学期試験準備を終えられた直後であったが、学科の先生方と準備室職員が事務方の協力も得ながら、一糸乱れず試験を実施し、学生の成績評価まで遺漏なく行われた。藤森先生が学生を愛し、またそれを知る同僚教員の信頼があったからである。倒れたことを知った学生たちは次々と先生の研究室ドア備え付けのメモ盤に書き込みを行い「先生の授業は難しくて厳しかったけれど好きです」「早く治ってまた教えて下さい」などのメッセージがあふれた。本質を妥協することなく丁寧に伝えようとする先生の姿勢は、本来数学が苦手なはずの多くの学生たちの支持を得ていたことが明らかになった。

最後に藤森先生と私の私的な関係について触れさせていただくことをお許し頂きたい。私が藤森教授を意識したのは2004年4月文教大学に着任してまもなくの教授会に出席した時である。その時は学部長として初めて教授会の進行を司られていたはずであるが、学部の将来構想に関わって、それまでの将来構想委員会のあり方について舌鋒鋭く議長席から批判を展開していた。その勢いがあまりにも強く感じられたので私は新参者であるにもかかわらず、つい抗弁してしまった。いやな奴が赴任してきたと警戒が走ったはずである。その翌月であったと思われるが、新任者の歓迎会の後、駅に向かって歩いていると藤森教授が後ろから一人で近づいてきて、一緒に飲もうと誘ってくれた。「学部長は他の方をほっておいていいのですか？」と遠慮したのだが、「いやいいんだ」と二人で居酒屋に入った。そこで二人は初対面ではないことが明らかになった。大学院生時代にある研究会で先生が報告をされ、その直後私から誘って食事を一緒にしていた。高度な数学理論に立脚する報告の中身は全く理解できなかったが、その切れ味の鋭さに私はまいってしまった。そのたった1回の接点が鮮やかによみがえり、その後互いに遠慮しない間柄となった。

現在大学は大きな転換点を迎えようとしている。学部もまた然りである。このような時に藤森先生はどう構想し、判断されるか、直接お話しを伺えない。いまはただゆっくりご静養になり、しっかり快復を図っていただきたい。いままであまりに忙しく動き回られていたので、今後は奥様とゆったり時間を過ごしていただきたい。大学・学部総意による感謝の意をこめてそのように願っています。